

大腸癌研究会プロジェクト研究

「括約筋切除を伴う肛門温存手術の妥当性」報告

・参加施設:

昭和大学 静岡がんセンター病院 高野病院 国立がんセンター東病院
群馬がんセンター病院 久留米大学 東京医科歯科大学 横浜市民病院
帝京大学 東邦大学

・班長:東邦大学医療センター 一般・消化器外科 寺本龍生

・プロジェクト開始年月日:平成17年3月2日

・目的および役割:

従来下部直腸癌に対しての標準術式は永久人工肛門を要する直腸切断術(APR)であったが、近年括約筋温存手術(SPO)、なかでも括約筋切除を伴う肛門温存手術(ISR・ESR)を行う様になってきた。今回プロジェクトを発足し、その妥当性を明らかにする。

・対象:

2000年1月からの各施設における根治を得られた APR・SPO(ISR・ESR)症例

・方法:

臨床病理学的検討:共通調査票を作成し各施設で調査した。

術後 QOL 調査:郵送による共通アンケート調査を実施した。アンケートは SF 36、EORTC etc. などを参考に当プロジェクトチームが独自に作成したものである。

・結果:

臨床病理学的検討:APR 169例、SPO 163例 (ISR 145例、ESR18例)であった。APR 群と SPO 群を比較し組織型・深達度・リンパ節転移・組織学的病期において有意差は認めなかった。術式別の再発率は APR 24.3%・ISR 15.2%・ESR 11.1%、生存率は APR 65.1%・ISR 83.0%・ESR 66.7%、無病生存率は APR 46.1%・ISR 79.8%・ESR 56.0% でありそれぞれに有意差は認めなかった。合併症に関しても両群間に有意差は認めず、APR に対して SPO は同等の成績であり、下部直腸癌に対する ISR, ESR は oncological には妥当な術式と考えられた。

術後 QOL 調査過程:平成19年7月現在、各群のアンケートの回収率は APR 群 約 66.6%、SPO 群 約 71.8% であった。今後、さらに回収率を上げる方法を検討し実施した上で、アンケートの集計解析を行う予定である。